

## 「チセ・ア・カラ われら家をつくる」 アイヌ語版について

以下は民映研ブログ掲載の本作品日本語版の紹介文である。

### 【民族文化映像研究所フィルム作品紹介】No.3

チセアカラ -われらいえをつくる

●1974年／57分／自主制作／北海道苫小牧市／1974年教育映画祭優秀賞／1974年東京都教育映画コンクール銀賞／1974年キネマ旬報文化映画ベストテン 5位

●記念すべき民映研作品の特色の1つである、「対話体」形式によるナレーション第1作目。

### 【作品解説】

1972年の春、萱野茂さんら二風谷の人々によって行われた、アイヌの伝統的な家作りの記録である。

家作りには二つの工法があった。一つは、地面に穴を掘り、柱を立て、その上に梁、桁、屋根と組み上げていく工法。もう一つは、屋根をまず地上で組み立て、それを人力で持ち上げて柱をかますチセ・プニ（家起こし）という工法。どちらも屋根の構造の基本をなしているのは、3本の材を結束した三脚状のケトゥンニである。ケトゥンニによる工法を、寄棟造りの原型とみる人もある。

アイヌの家作りは、祈りに始まり祈りに終わる。はじめに敷地にポン（小さな）・ケトゥンニを立て、火をたき、イナウ（木を削って作る祭具）を立て、祈る。そこにいた虫や獣たちの霊を慰めるとともに、この土地を一時貸してくださいという意味をもつ火の神への祈りである。家が完成するとチセ・ノミ（家への祈り）。そこでは、屋根裏にヨモギで作った矢を射るチセ・チョッチャが行われ、材料となった木や草の悪霊を鎮める儀式をする。あるいはチセコロカムイ（家の守護神）を作り東側の柱の後ろに安置する。囲炉裏の消し炭を火の神からいただき、サンペヘ（心臓）としてつけたイナウである。

アイヌの家作りには、アイヌの知恵や自然観をうかがうことができる。そして、それらと密接にかかわったアイヌ語の表現のおもしろさ。ケトゥンニはそのよい例で、「（自然あるいは神から）私・借りた・木」という意味だという。また、一对のケトゥンニをつなぐ構造材、チセマカニ。「家・開く・木」という意味で、屋根の横ゆれやひずみを防ぐ。他に、屋根の茅をしっかりとおさえるレウエサクマ（曲げる柴）、あるいは棟の雨漏りを防ぐための針を使わない葺き方、ヤイコケメイキ（自ら針を使う）、壁になる茅がすかないようにとめるイトウリテセ（のぼして編む）の方法など、次々と現れる。

●この作品には、英語字幕・アイヌ語音声版もあります。

●関連作品……作品 2「アイヌの結婚式」、作品 8「イヨマンテ-熊おくり」、作品 10「沙流川アイヌ子どもの遊び」、作品 11「アイヌの丸木舟」、作品 40「標津・竪穴住居をつくる」、作品 41「沙流川アイヌ子どもの遊び-冬から春へ-」、作品 100「シシリムカのほとりで-アイヌ文化伝承の記録」

上映貸出用 DVD のお問い合わせは、

民映研メール minneiken@alpha.ocn.ne.jp or 070-6565-2305 まで

付記 文責：岡田一男

この作品は、1974年にいまだ映画制作会社グループ現代と民族文化映像研究所が未分化の時代に製作された。16mm作品の原版は株式会社グループ現代の管理下にあるのだが、一般社団法人民族文化映像研究所は、この作品を民映研作品番号 No.3として扱っている。同じ制作グループが関わったアイヌ関連作品に先行する「アイヌの結婚式」(1971)と共にクレジット表記はグループ現代作品と表記されている。この作品の後に製作された「イオマンテ」(1977)からは、純然たる株式会社民族文化映像研究所作品として制作された。微妙な事情があるので、今回はグループ現代、民映研双方に、日本映像民俗学の会二風谷大会でのアイヌ語版上映の了解をとった。上映するBD-Rは、民映研の理事の一人、姫田蘭が、今回の会のために特別に作成したものであることをお断りしておく。というのもアイヌ語版の画像データはサンプリング容量が小さく、大会場での上映には難があり、英語版字幕にも難があり、岩波書店版「日本のドキュメンタリー」に本作品日本語版が収められた時、作成した日本語版画像データをベースとして、そこにアイヌ語版音声を載せ、新たに作成した英語字幕を入れなおすという作業をしている。

この作品は日本語版が姫田忠義と萱野茂の対談で構成されているのに対し、アイヌ語版は萱野茂がウウエペケレ調の一人語りで構成されている。プロデューサー役だったスタッフの一人、小泉修吉の発意でアイヌ語版が製作されることになった時、萱野茂も、姫田忠義も半信半疑であったと撮影の中心であった伊藤碩男(みつお)は、自らまとめた作品のシナリオ集に記している。どういう意図で、こうなったか、アイヌ語版に付されているのは英語字幕である。原本は国会図書館や、幾つかの大学図書館にも所蔵されているが、萱野茂の書いたカタカナ表記のアイヌ語テキストと自身の逐語訳による全文を載せたシナリオ集が発行されている。岡田はグループ現代所蔵のシナリオ集から、アイヌ語版部分をPDF化させていただいた。シナリオ集を久々に見た伊藤碩男は、逐語訳に日本語として、疑問を呈していられたが、かえって当事者自身による逐語訳だからこそ価値が高いと思っている。

将来、グループ現代と民映研双方納得の上で、新たな高画質デジタルスキャンが行われ、逐語訳日本語字幕が付されるならば、この作品はアイヌ語復興への重要なツールとして大きな意義を持つかと思う。

民映研は、出発時公益法人であることを目指しながら、当時の公益法人法の厳しい条件から株式会社として出発せざるをえなかった。そういう意味では一般社団法人としての再出発は、初心に帰ろうという関係者の意思であろう。ただ現在は、所長であった姫田忠義、事務局長であった小泉修吉の没後、新規の制作は行わず、旧作品の上映活動が中心の運営となっている。

上映交渉の過程で、本作品に直接かかわった、萱野志朗(萱野茂アイヌ資料館館長)、惣川修(演出)、伊藤碩男(撮影)、英語版字幕作成にかかわった嶋田みどり、グループ現代社長田野稔、川井田博幸(プロデューサー)、一般社団法人民族映像文化研究所代表理事小原信之、同理事姫田蘭、今井友樹の各氏に助言をいただき、制作事情なども伺った。長年にわたり日本映像民俗学の会と民族文化映像研究所は、疎遠であった。交流の確立を願ってきた者として、遠くない将来、民映研が体力を回復され、新規作品をもって日本映像民俗学の会に参加されることを祈っている。